

# 青少年ふくしま

福島県青少年育成県民会議  
第47号

平成27年7月2日(木)

日頃より福島県青少年育成県民会議の諸行事等に御支援を賜りましてありがとうございます。今年度も子ども・若者が健やかに伸びていくことを願い、諸活動を推進しておりますのでどうぞよろしくお願いたします。

## <福島県青少年育成県民会議について>

昭和41年5月の青少年育成国民会議結成に呼応し、官民一体の青少年健全育成県民運動推進の母体として、昭和41年10月29日に結成されました。(全国で14番目)さらに、平成9年度までに県内すべての市町村に「青少年育成市町村民会議」が設置され、地域に根ざした青少年健全育成活動が行われています。

青少年育成県民会議の組織等は以下のとおりです。

**役員** 会長：福島県知事 副会長：2名  
理事：11名(鈴木登三雄常勤理事は福島県青少年会館館長と兼務)  
監事：2名

**会議員** 関係行政機関、学識経験者、青少年育成団体、青少年団体、報道機関  
(今年度は130の個人・団体)

## 重点推進事項

- 1 大震災の影響から子どもを守り、健やかに育てる活動の推進
- 2 「大人が変われば、子どもも変わる県民運動」の推進
- 3 「地域の子どもは、地域で見守り育てる運動」の推進
- 4 社会環境浄化活動(「有害図書三ない運動」「携帯電話・インターネットの被害から子どもを守る運動」等)の推進

## 事業の概要

- 1 大人が変わるためのセミナー～『思春期から青年期の親の心構え』
- 2 「家庭の日」作品コンクール
- 3 福島県青少年育成県民会議会長表彰
- 4 第37回少年の主張福島県大会
- 5 福島県青少年健全育成推進大会
- 6 「大人への応援講座」の開設支援
- 7 「福島県青少年総合相談センター」の運営
- 8 関係機関との連携の強化と広報活動の推進

## 連絡・問い合わせ先

TEL 024-546-0002

FAX 024-546-8311

HPアドレス <http://www.fukushima-youth.com/>



平成26年度「家庭の日」絵画部門

3・4年生の部最優秀作品

「楽しかった たんじょう日」

大熊町立熊町小学校 齋藤 蒼さん



職員手植えの  
フラワー  
ポット



## 常勤理事からのメッセージ

「こども未来局」にエールを送る

福島県青少年育成県民会議 常勤理事 鈴木 登三雄

今年4月から、県の新しい組織「こども未来局」がスタートした。この新しい組織は、子ども・子育て支援と青少年の健全育成を総合的に推進するために設けられたものであり、局内には新たに「こども・青少年政策課」も設置された。これら新組織に、大きな期待を寄せるものである。

本来、行政組織の名称は、簡潔明瞭を旨とし、所掌分野を端的に総称するかたちでネーミングされるものだが、新組織には「未来」という言葉が使われている。およそ県の組織名としてこれまで使用例がなかったこの言葉に、ある団体役員の方が「ワクワク感を覚える」と話されていたが、まさに同感である。福島の未来を担うこども・若者のためにと、思いや意気込みを象徴しているようだ。ぜひとも、設置理念に沿って、効果的な取組を展開されるよう期待したい。

ところで、長く行政組織の中に身を置いていた立場からすれば、立場が変わったからこそ見えてくるものがある。それらは、組織と人との巡り合わせに関係する問題であり、要は、主体性、スピーディさ、課題認識、熱意、責任感がどうかといったことに帰着する問題なのかもしれない。いずれにせよ、行政客体である関係団体や県民に、間違っても失望や憤りを抱かせるようなことはあってはならないし、組織目標の達成のため、各客体との強固な連携・協調関係を築いていくことが肝要なのであろう。

こうした点は、勿論、新組織には杞憂にすぎないだろう。すでに新しい確かな変化が感じられるし、実務を通して、積極性、進取性、迅速性が十分に伝わってきている。新組織の下で、関係機関・団体との連携も深まり、こども・若者の「未来」に向けたパートナーシップが強まることを期待したい。改めて、「こども未来局」に心からのエールを送る。

去る6月15日(月)、福島県青少年会館において「第1回大人が変わるためのセミナー」を開催しました。大変有意義な講演会となりましたので、概要を紹介します。

## 演題 「子ども・若者の育ちと周囲のかかわり」

講師 福島大学人間発達文化学類 教授 角間 陽子 氏

○ アフリカのことわざ：「子ども一人育てるには、村中の人が必要」

○ かつての日本：大家族、地域協団体→たくさんの大人が様々な形で子育てに関わった。

○ 現代の日本：核家族化、都市化→子育てに関わる大人が少なくなってきた。

○ 大人が子どもに関わる手段として→**世代間交流**  
⇒子ども、青年、中・高年が、お互いに



自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりをする活動で、一人ひとりが活動の主役となること。

○ これまでの「世代間交流」：自然発生的、子育て支援、文化継承、介護予防等々。

○ 日本人の考え方：「円環型」→子どもと高齢者（「還暦」）は「近い」という意識がある。

○ これからの「世代間交流」：かかわりの「質」を向上させていく。

＜幼老統合・複合型ケアの事例＞

- ・ 保育園・コミュニティセンター、障がい者施設→園児が毎日交流
- ・ 廃校の校舎を活用→デイサービス、放課後児童クラブ、自由使用スペース
- ・ 空き教室で低学年とケアを受けている高齢者が交流（文化の伝承）
- ・ 外国の例：高齢者施設に子どもの活動スペース設置、集合住宅での交流

○ プログラムとしての世代間交流の重要性

・ 「**世代間交流プログラム**」：高齢者と若者世代の間に、意図的で継続的な資源交換と相互学習のための対話を創造する社会的手段

・ 「**アクティブエイジング**」：生活の質を低下させることなく、社会参加を続けながら年を重ねていくこと。2012年 EU が「アクティブエイジングと世代間の連帯のための欧州年」と定めた。→老若共に支え合う社会への転換

・ 従来からの「孫育て」→ 大きな意義、満足感

・ 男性高齢者のかかわり事例（ストックホルム）：「クラスのおじいちゃん」→「学習支援」よりは「いじめ防止」等の見守り。6か月の研修を受けて配属。→挨拶を交わし、話を聞いてもらうだけで心が軽くなる（子どもの感想）

・ 目的をしぼると成果が分かりやすい。（「読み書きに特化した学習支援」等）

・「子ども」「高齢者」「学校」三者ともに有益（トリプルウィン）

- 世代間プログラムの本質的要素
- ① **役割**：誰でも何かしら他の役に立てることがある。
- ② **関係づくり**：よい関係を築くための「しかけ」が必要。
- ③ **互惠性**：相互関係が成り立っている。
- ④ **賞賛**：お互いを認め合い、敬意を表し、感謝の意を表す場面を設る。
- ⑤ **やりがい**：個人やコミュニティ、参加者のニーズを反映させる。



○ かかわりの質を向上させるために

- ・子どもの「共生意識」や「自尊意識」の段階に応じた方法を工夫する。（小学生と高齢者の食事会での座席配置、感想の伝え方等）
- ・地域、行政、教育、研究のコーディネイト←専任コーディネーターが必要（外国は有り）
- ・「異世代共同」「情緒的サポート」の実践。
- ・子ども・若者のニーズ→「生活基盤をしっかりとりたい」に応じている事例
- 「カタリ場」（大学生が中校生にかかわり、水面下で大人がサポート）
- 若者が高齢者の人生を聞き取り文章化して編集する。
- 若者が過疎地域の住宅に低家賃で住み、地域行事に参加する。
- 児童クラブを若者が夜間利用する。
- 自宅の空き部屋を若者に提供して居場所づくりに協力する。

- 人間性の最高価値＝心身ともに健康で**自己実現**に向かうこと。（マズローの欲求階層説）
- ・自己実現：日々の生活の重要性を認識し自分らしい生活を主体的に創造していくことによって可能。←**学校における「家庭科」教育の重要性**を再認識したい。
- 世代間交流⇒楽しい活動を通して、多くの切実な問題を解決する手段といえる。

<参加者の感想より>

- 子どもの問題は、子どもだけではなく家族のかかわりに大きな比重があると思う。
- 所属する職場で「学校支援ボランティア」事業を実施しているので、その事業が本来目指すべきあり方を考えるきっかけになった。
- 子どもと大人の新しい付き合い方を学ぶことができた。若者とリタイア層は、近い存在であることがとても印象的だった。
- 子育てには、高齢者との交流が必要だということがわかり、もう少し、おじいちゃん、おばあちゃんたちと会う機会を増やしていきたいと思った。世代間交流はとてもいい交流活動だと思った。今後、こういう施設が増えたらもっといいと思った。
- 自己有用感について、まずは家庭でと思う。

**第2回大人が変わるためのセミナー（パネルディスカッション）：7月25日（土）13：00～14：45**  
**会場：福島県青少年会館 詳細はチラシに記載 ぜひ、おいでください！！**